from the world 世界の国から

モンゴル国

Mongolia

モンゴル国

首都……ウランバートル
面積……約156.4万km²（日本の約4倍の広さ）
人口……約247万5,400人(2002年)
政体……共和制
宗教……チベット仏教(ラマ教)など
元首……ナツァギーン・バガバンディ大統領

民間企業の成長に伴い環境面の取り組みを強化

社会主義から脱却しビジネス経験を積む

モンゴルは、1992年に旧コメコン体制下の社会主義経済から市場経済に移行し、積極的に経済・経営面での改革を進めてきました。急進的な体制の変化は混乱を招いたりもしましたが、現在は問題も解決され、安定を取り戻しています。

資源探査のためのボーリング風景

ほとんどの国営企業が民営化され、民間がビジネスの経験を少しずつ重ねてきたことが、成長につながっています。

産業は、金・銅などの鉱業をはじめ、羊毛・カシミア製造業、食品加工業などが盛んで、95年頃からは特に中小の企業や工場が増えてきています。投資環境も改善され、諸外国との経済関係も以前に比べて広く、深いものになりました。

クリーナー・プロダクションの浸透が課題

今回の来日では、羊毛・カシミア製品製造や食品加工、バイオ関連など6つのプロジェクトを紹介しましたが、すべてに共通しているのは、クリーナー・プロダクション(CP：工場の生産効率改善により、環境負荷を軽減する産業管理手法)を必要とする業種だということです。

民間企業の成長に伴い、モンゴルでもCPへの対応が求められています。オランダ政府の協力を得て、「Tuul Green Investment Network」というプロジェクトを2002年に立ち上げ、CPの発想をモンゴルの産業分野に浸透させるため、電力・水の効率的な使い方や廃棄物の削減、リサイクルなど、環境面から様々な取り組みを行ってきました。

モンゴルに今必要なのは、CPに関する技術、あるいは資金協力を海外から導入することです。また、社会主義体制時につくられた工場は技術的にも遅れ、機械も老朽化しています。ぜひ日本からの協力を受け、CPの浸透を図っていきたいと考えています。

日・モンゴル関係のさらなる発展に期待

2月2日～27日までの滞在期間中に、主に企業との個別面談を通じて、

自然と調和して暮らす遊牧民

市場経済への移行に伴い、都市化が進むウランバートル市内

一般的なモンゴルの投資環境や、輸出可能な産物や製品について紹介しました。

CPへの投資がどのような利益を生むのか、企業の担当者に説明するのはなかなか難しいところもありましたが、協力を申し出てくれたり、ビジネスに関する様々なアイデアを出してくれたり、有意義な面談・訪問を行うことができました。日本の工場や牧場も見学しましたが、食品の安全に対するレベルの高い管理体制を知り、大変勉強になりました。

今回は初めての来日でしたが、どこへ行ってもモンゴル出身の横綱・朝青龍関の話題となり、とてもうれしく思いました。相撲をきっかけに、ビジネス面でもモンゴルと日本の交流がますます発展することを期待しています。

ジグジッド・オユンチメグ
モンゴル商工会議所
ビジネス・投資支援センター課長
Mrs. Jigjid Oyunchimeg
Head
Business and Investment Centre
Mongolian National Chamber of Commerce and Industry

（写真提供：モンゴル政府観光局、JICA、アリマジャパン）